

チェコ国歌に潜んでいた矛盾

——両大戦間チェコスロヴァキアの民族問題——

石川 達夫

はじめに

多民族共存の問題を考える上で、民族運動とナショナリズムの問題は避けて通ることができない。

ヨーロッパを代表する多民族国家であったハプスブルク帝国は、18世紀後半に生じた民族運動（チェコの場合は「チェコ民族再生運動（České národní obrození）」と呼ばれる）と19世紀を通じて高まってきたナショナリズムの力によって1918年に最終的に解体し、さらにハプスブルク帝国の後継国家である、より小規模の多民族国家チェコスロヴァキアとユーゴスラヴィアも1989年の「東欧革命」以後、多分にナショナリズムの力によって解体していった。

チェコ人がハプスブルク家の支配を脱して約300年ぶりに独立を回復し、1918年に建国したチェコスロヴァキア共和国（両大戦間のいわゆる「第一次共和国」）は、チェコ人のほか、スロヴァキア人、ドイツ人、ハンガリー人などが住む多民族国家であったが、寛容なマイノリティ保護法¹を備えていたと評価され、外国人亡命者を手厚く保護したことでも知られ²、東欧の中で唯一高度な民主主義を実現し維持した国家として賞賛される³。だが、そのような共和国とて、決して民族問題を解決できたわけではなかった。それどころか、

¹特に「チェコスロヴァキア共和国憲法」の第6章「民族的、宗教的、人種的マイノリティの保護」およびそれとセットになった「言語法」（共に1920年2月29日発布）。Cf. „Ústava Československé republiky (1920. 29. únor),“ „Jazykový zákon(1920. 29. únor),“ in Zdeněk Veselý, ed., *Dějiny českého státu v dokumentech* (Praha: Epoque, 2003).

²1921年から政府主導の「ロシア人支援活動（Ruská pomocná akce）」が開始され、ロシア（後にソ連）からの亡命者への大規模な支援が行われた。そのおかげでロシア人やウクライナ人などは、チェコスロヴァキアで自分たちの言語で教育や文化などを享受することができた。

特に大統領を務めたマサリクや首相を務めたクラマーシュは、支援活動に私財まで投じていた。またマサリクの娘アリツェは、チェコスロヴァキア赤十字の代表として、この活動において重要な役割を果たした。Cf. Anastasia Kopřivová, *Středisko ruského emigrantského života v Praze* (Praha: Národní knihovna ČR, 2001), s. 7-11.

³例えばカール・ポパーは、マサリクが大統領を務めたチェコスロヴァキア共和国は、「おそらくかつて存在した最良かつ最高の民主主義国家の一つ」であったと述べている。カール・ポパー『開かれた社会とその敵——第2部 予言の大潮』小河原誠・内田詔夫訳（未来社、1980年）、307頁。

I 論文

ナショナリズムを基盤として打ち立てられたこの国は、チェコ人とスロヴァキア人との間の軋みに加えて、人口の約4分の1をも占めるドイツ系住民と「チェコスロヴァキア人」との間に深刻な対立を抱えており、主としてナチスの圧力と3つの構成要素の間の遠心力によって最終的に分解してしまった。そしてその「遠心力」とは、ナショナリズムの力であったと言って良い。ここに、多民族国家における多民族共存とナショナリズムとの関係の問題性と困難さが典型的に見られると言える。

本稿では、多民族国家チェコスロヴァキアにおけるこのような多民族共存とナショナリズムとの関係の問題性と困難さを、国家の重要な象徴であるチェコ国歌の分析を通じて考察する⁴。

1

1918年のチェコスロヴァキア独立から現在に至るまで、チェコ国歌は「わが故郷はいずこ？ (Kde domov můj?)」という歌である。この歌は、チェコ民族再生運動期の劇作家ヨゼフ・カイェターン・ティル(1808~56)の戯曲『フィドロヴァチカ、あるいは怒りもなく争いもなく——プラハの生活による4場面』(1834年)の中で老いた盲目のヴァイオリンひきマレシュが故郷の姿を幻視してうたう歌であり、ティルの詩に作曲家のフランチシェク・シュクロウプ(1801~62)が曲を付けたものである。

Kde domov můj? Kde domov můj?

Voda hučí po lučinách

bory šumí po skalínách,

v sadě skví se jara květ –

zemský ráj to na pohled!

A to je ta krásná země –

[: česká země – domov můj! :]

Kde domov můj? Kde domov můj?

V kraji znáš-li bohumilém

duše útlé v těle čilém,

⁴ ちなみに、チェコ出身の作家ミラン・クンデラは、大民族と小民族の相違が国歌に表れているとして、次のような興味深い指摘をしている。「小民族とは何か？ 私はこう定義すればいいと思う。小民族とは、その存在自体がいつでも疑問に付されうる民族である。小民族とは、消滅してしまうこともありえ、またそのことを自覚している民族である。フランス人やロシア人やイギリス人には、自民族の生き残りそのものについて問うような習わしはない。彼らの国歌は、ただ栄華と永遠だけを歌っている。しかしながら、ポーランドの国歌は、『ポーランドいまだ滅びず……』という詩句で始まるのだ」。Milan Kundera, "The Tragedy of Central Europe," *New York Review of Books*, 26 April 1984, 35-36.

mysl jasnou, znik a zdar
a tu sílu, vzdoru zmar:
to je Čechů slavné plémě –
[:mezi Čechy – domov můj! :]⁵

わが故郷はいずこ？ わが故郷はいずこ？
草原に水がささやき、
岩のそこここに松がざわめき、
園には春の花が輝く——
その眺めは地上の樂園！
そしてそれは、あの^{うま}美し国——
（チェコの国——わが故郷！）

わが故郷はいずこ？ わが故郷はいずこ？
君知るや、神の^よ嘉みせし地で、
澁刺たる体に細やかな心、
^{きと}聡しき頭、繁栄を導く、
そしてその力、圧迫を撥ね返す。
それは、チェコ人の栄えある種族——
（チェコ人の間に——わが故郷あり！）

歌詞は素朴であり、曲はなかなか美しい。19世紀前半に作られたこの歌は、チェコ・ナショナリズムの高揚と共に熱愛されるようにさえなり、チェコ人はこの歌に熱い思いを込めてきた。現在では「公式ヴァージョン」が定められており、その演奏をWEBサイト⁶から自由にダウンロードして様々な機会に用いてよいことになっている。

ところが、チェコ人の伝統あるこの「高尚」で「威厳に満ちた」国歌をめぐるのは、いろいろと驚くべきことがある。

それはまず、この歌が元々入っていた『フィドロヴァチカ』という戯曲は、チェコ民族の栄光を讃えるために作られたスメタナのオペラ『リブシェ』のような、いかにも祝典的で威厳に満ちた作品ではなく、「フラシュカ (fraška)」と呼ばれるジャンルの喜劇であり、かなり滑稽な作品だということである。しかも、1834年に書かれたこの戯曲は、実はそれほど成功を収めたわけではなく、初演の3週間後に再演されたきり全く上演されなくなり、

⁵ *Kde domov můj: Varianty a parafráze* (Praha: Paseka, 2004), s. 11. この詩はティル自身が幾つかのヴァリエーションを作っているが、これは「決定版」とされるテキストである。

⁶ <http://www.hrad.cz/cs/ceska-republika/statni-symboly.shtml>

I 論文

作者自身でさえこの作品を評価していなかったというのである⁷。また、戯曲の中でこの歌をうたうマレシュは、最後の第4場で何やら唐突に一瞬登場するだけの脇役中の脇役であり、この歌をうたう以外には台詞もほとんどしゃべらないのである。さらには、そもそもこの詩そのものも、凡庸なものであると言わざるをえないであろう。

それにもかかわらず、この詩に曲をつけた歌はチェコ人の間に非常に広まって「民族賛歌」という格を与えられ⁸、人々に涙させるほどの感動を与えるようになった。異国で暮らすチェコ人たちを感涙させたという報告もたくさん残されており、第一次大戦中はロシアで対オーストリア＝ハンガリー反乱軍となった「チェコスロヴァキア軍団」と呼ばれるチェコの兵士たちを感涙させたという⁹。

そして、第一次大戦末期の1917年に、80年あまり忘れられていた『フィドロヴァチカ』がプラハのヴィノフラディ劇場で新しい演出のもとに再演され（この頃、国外に亡命したT・G・マサリクが指導者となって、「チェコスロヴァキア軍団」を武器に独立運動が展開されており、チェコの独立が復興される望みがあった）、劇の中で盲目の老人が「わが故郷はいずこ？」を歌う段になると、突然客席にざわめきが起こり、劇場にいた人々はみな立ち上がって、胸を打たれて涙を流す聴衆がアンコールを求め、舞台と客席の人々みながこの歌を唱和したという。この年、『フィドロヴァチカ』はなんと70回も上演され、翌1918年にハプスブルク帝国が崩壊してチェコスロヴァキアが独立すると、「わが故郷はいずこ？」はついにチェコ国歌となったのである¹⁰。

ところで、『フィドロヴァチカ』という戯曲の滑稽さのかなりの部分は、この作品で描かれている世界が言語的・民族的混沌の世界であり、その中で言語的遊戯が行われる、と

⁷ 上演を見た演劇批評家でプラハ大学美学教授アントン・ミュレルは、日刊紙『ボヘミア』での批評において、若い作者ティルは、チェコでチェコ語を話さないことは恥だという一種の固定観念に捕らわれていて、すべてがこの観念の周りを回っている、と批判した。作者ティルはこの戯曲の原稿を焼いてしまったとさえ言われたが、実際には1862年に家族が保管していることが分かった。Cf. Vladimír Macura, *Český sen* (Praha: Nakladatelství Lidové noviny, 1998), s. 50. Robert Sak, „Česká ‚Píseň písni‘ v historickém kontextu,“ *Státní hymna České republiky v proměnách doby* (Praha: Úřad vlády České republiky: Národní muzeum: Národní divadlo: Český rozhlas, 2008), s. 27, 40. Markéta Kabelková, „Kde domov můj,“ in *Státní hymna České republiky v proměnách doby*, s. 76-77.

⁸ 1851年に出版されて以来多くの版を重ね、チェコ人が集う様々な機会に歌われた『チェコ社交歌集』（ヨゼフ・ボイスラフ・ピフル編）において、1859年の第4版で「民族賛歌(národní hymna)」の地位を与えられていたのは、チェコの古い宗教歌「主よ、我らを生き残らせたまえ」であったが、1863年の第5版ではもう「わが故郷はいずこ？」になっていたという。Cf. Karel Šima, „Národní slavnosti šedesátých let 19. století jako performativní akty konstruování národní identity,“ *Český časopis historický*, 2006, č. 1, s. 90-91.

⁹ Cf. Macura, *Český sen*, s. 48, 50.

¹⁰ ヤン・ヴェーニグ『プラハ音楽散歩』関根日出男訳（晶文社、1989年）、270頁参照。

「わが故郷はいずこ？」は1920年の政府の決定において国歌とされ、1930年の決定においてその第一連を国歌とすると厳密化された。ただし、憲法において国歌を国家の象徴に含めたのは1990年になってからであり、チェコとスロヴァキアが分離して1993年に発効したチェコ共和国憲法においても国歌がチェコ共和国の国家の象徴に含められている。Cf. Sak, *op. cit.*, s. 40-42. *Dějiny českého státu v dokumentech*, s. 442.

いうことに由来する。この戯曲には、ハプスブルク帝国内で多民族・多言語共存状態にあった当時のチェコの状況を反映して、チェコ人、ドイツ人、ユダヤ人、さらには何人かはっきりしない人間が登場し、台詞はチェコ語、ドイツ語、妙なドイツ語の混じったチェコ語、妙なチェコ語の混じったドイツ語、さらにはフランス語やイタリア語などがまぜこぜになったチェコ語で語られる。ドイツ語は台詞全体の約3分の1をも占めているので、ドイツ語の分からない観客——当時のチェコの上層階級や知識人はドイツ語ができるのが普通であった——にはそもそもこの劇を理解することさえできず、チェコ語とドイツ語の両方が分からなければ、この作品の滑稽さもまた分からない。

言語的混沌から生じる滑稽さを含んだ台詞の例は、幾らでも挙げることができるが（日本語に正確に訳すことはほとんど不可能である）、例えばチェコ語に妙なドイツ語を混ぜて話すチェコ人女性マスチールコヴァーは、次のように言う。

Nestydíš se, mluvit na ewentlich ulici s člověkem, který nestojí ani na první štafli bildunku?¹¹

教養 [bildunk=ドイツ語 Bildung] の初歩的段階 [štafle=ドイツ語 Staffel がチェコ語化した俗語的表現] にもいない人間と、ひょっとして [ewentlich 俗語的なドイツ語?] 通りでしゃべるなんて、恥ずかしくないの？

また、ドイツ語に片言のチェコ語を混ぜて話すドイツ人男性オンドジェイ（アンドレアス）は、次のように言う。

Ano – vyspím; tak vinšovat jemnostpany – Pozor ! – Ich habe die Ehre, einen guten Morgen zu wünschen.¹²

はい、目覚めます。そうして皆様に望みます [vinšovat=ドイツ語 wünschen がチェコ語化した俗語的表現] ——注意してください！ [ここまでがチェコ語] 私は、朝の挨拶を申し上げられれば光栄なのです。

そして、オンドジェイがチェコ人の少女二人にドイツ語の挨拶を教えようとする、彼女たちはそれを真似して実に滑稽な発音をする（これはもはや日本語には訳出できない）。

オンドジェイ

– einen – guten – Morgen – （アイネン・グーテン・モルゲン）

¹¹ Josef Kajetán Tyl, *Fidlovačka aneb žádný hněv a žádná roačka: Čtvero obrazu dle života pražského* (Praha: Státní nakladatelství krásné literatury, hudby a umění, 1958), s. 41.

¹² *Ibid.*, s. 73.

I 論文

イールカ

– aijen – morten – gugen (アイイェン・モルテン・グゲン)

オンドジェイ

– zu wünschen. (ツー・ヴェンシェン)

二人

– cuvinči! (ツヴィンチ!)

イールカ

Hahaha, cuvinči! Aijen – ere – gurjen – já už umím německy! (ははは、ツヴィンチ！
アイイェン・エレ・グルイェン——私、もうドイツ語できるわ!)¹³

また、何人かよく分からない（別言すれば民族性をほとんど喪失した）チェコ人男性ドゥデクは、チェコ語にフランス語やドイツ語その他を混ぜて、次のように言う。

Byla to malinkej – comment to říkat? – malinkej špás jenom –¹⁴

それは、ちょっとした——なんと（comment フランス語）言ったっけなあ？——ちょっとした冗談（špás=ドイツ語 spaß がチェコ語化した俗語的表現）にすぎません……

また驚くべきことに、チェコ人の間に広まった、この『フィドロヴァチカ』の中の「わが故郷はいずこ？」という詩は、数多くのヴァリエントや改作をも生み出した。そのような作品を集めた『わが故郷はいずこ？——ヴァリエントと改作』¹⁵という本には 60 以上の作品が収められている。のみならず、この詩は他のスラヴ人の間にも広まり、各スラヴ語の翻訳やヴァリエントをも生み出したのである。それを調べたパータの『スラヴ諸語の翻訳とヴァリエントにおける「わが故郷はいずこ？」』によれば、この詩が 1839 年にクロアチア語に訳されたのを始めとして、スロヴェニア語、セルビア語、ブルガリア語、ポーランド語、上ソルブ語、下ソルブ語、ロシア語、ベラルーシ語に翻訳や改作されたという¹⁶。実は、そもそもティルの詩自体が、決してオリジナルな作品ではなく、詳細については省略するが、先行する様々な作品を踏まえているのである¹⁷。

¹³ *Ibid.*, s. 74.

¹⁴ *Ibid.*, s. 170.

¹⁵ *Kde domov můj: Varianty a parafráze* (Praha: Paseka, 2004).

¹⁶ Cf. Josef Páta, „Kde domov můj“ v slovanských překladech a obměnách (Praha: nákladem vlastním, 1934), s. 4-18.

¹⁷ Cf. Macura, *Český sen*, s. 49. Pavel Spunar, „Paradisus et partia,“ in *Kde domov můj: Varianty a parafráze*, s. 103. Milada Součková, „Locus Amoenus: An Aspect of National Tradition,“ in Peter Brock, *The Czech*

ところで、盲目の老人を取り巻く現実世界は、チェコ人やドイツ人やユダヤ人や何人か分からない者たちが混じり合い、チェコ語やドイツ語などが入り交じる言語的混沌と民族的非自明性の世界だが、そのような雑然たる現実世界の中から、盲目の老人が——まるでその現実にならぬかのように——唐突に歌いだす歌によって忽然と立ち現れる「わが故郷」＝純粋な「チェコ人の国」のヴィジョンは違う。それは、チェコ人の間にある夢の祖国であり、チェコ人の「栄えある種族」の住む理想郷である。そしてそれは、目に見える現在の世界ではない——ということつまり、過去か未来の世界であり、過去の世界であると同時に未来の世界でもあると言えよう。すなわち、現在にとっては到達しがたい理想の世界（＝未来）の像が過去に投影され、それを潤色して神話的な過去の像になったものである。このような「失樂園」の表象は、一方では哀しみを呼び起こすが、他方では未来に投影されて民族の明るい未来を約束し、人々を鼓舞する。マツラによれば、この歌はしばしば宗教的なパースペクティブにおいてコラール＝賛美歌として、ミサとして、祈りとして捉えられたというが¹⁸、それも、過去の「失樂園」であると同時に未来の理想郷でもある表象という性格から来ていると言えよう。そして、そのような理想の「祖国」という主題が、多くの変奏を生み出したのである。

ティルの詩を他のヴァリエーションや改作と比べたときに際立つ特徴は、この詩が非常に抽象的だということである（これがこの詩の「凡庸さ」の一つの原因とも言えよう）。ティルの詩には、「チェコ」以外には固有名詞が一切出てこず、具体的な場所や時代や人間を特定するような言葉がないのである。もう一つの特徴は、この詩が現実の否定的な面を一切反映していない、完全に肯定的なものだということである。このことは、逆に現実の否定的な面を誇張した（ボレスラフ・ソコルによる）次のような改作と比べると際立つ。

KDE LEV ZTRATIL ZUBY

Kde domov můj? Kde domov můj?
 Zákony kde píší kyje,
 kde rakouská provincie,
 němčina kde úřední,
 kde couváme den ke dni.
 Ach to je ta krásná země,
 [: země česká, domov můj!:]

Kde domov můj? Kde domov můj?
 V kraji znáš-li poněmčilém

Renascence of the Nineteenth Century (Toronto: University of Toronto Press, 1970), pp. 28-32.

¹⁸ Cf. Macura, *op. cit.*, s. 50-52.

I 論文

duch otrocký v těle shnilém,
starých práv úplný zmar,
lev už ztratil zuby stár;
to je Čechů slavné plémě,
[: mezi Čechy domov můj! :]¹⁹

獅子²⁰が歯をなくした所

わが故郷はいずこ？ わが故郷はいずこ？
棍棒が法を書いている所、
オーストリアの田舎のある所、
役所のドイツ語のある所、
日ごとに我らが退く所、
ああ、それがその美し国、
(チェコの国、わが故郷！)

わが故郷はいずこ？ わが故郷はいずこ？
君知るや、ドイツ化した地で
腐った体に奴隷の魂、
古き権利は完全に打ち砕かれ、
獅子はもはや老いて歯をなくした、
それがチェコ人の栄えある種族、
(チェコ人の間にわが故郷あり！)

このような否定的な表象が人々を強く感動させ、人々の間に広く流布し、国歌にまでなることはありえないのは自明であろう。

ティルの詩は、言語的混沌と民族的非自明性の現実世界にあつて、現実の否定的な面を捨象した全く肯定的な「失樂園」のイメージによって、実は現実の否定面を言外に意識させつつも、全く肯定的な祖国と民族の(再)創造——「失樂園」の回復——のための呼びかけとなり、促しとなったのではなからうか？ そしてそれはまさにチェコ・ナショナリズムにぴったりのものだったのであり、成功作とは言えない『フィドロヴァチカ』という戯曲中の「わが故郷はいずこ？」というむしろ凡庸な詩に、誰にでも親しみやすいメロディーを付けた歌だけがチェコ人の間に広まり、ついには国歌にまで昇格したという、この詩＝歌の意外な大成功の秘密は、まさにそこにあるのではなからうか？

¹⁹ *Kde domov můj: Varianty a parafráze*, s. 69.

²⁰ 獅子は、チェコ王国の紋章に使われている象徴である。

2

後に国歌となったティルのこの詩には、実は大きな矛盾が潜んでいたと考えられる。それは、この詩が、異なる二つの祖国概念、祖国についての二つのイデオロギーを表象化したものだということである。

プラハから始まった 30 年戦争（1618～48 年）の初期の「ピーラー・ホラ（白山）の戦い」（1620 年）でチェコ・プロテスタント勢力がハプスブルク皇帝とカトリック勢力に致命的な敗北を喫した結果、チェコは実質的にハプスブルク家にほとんど独立を奪われた。そして、亡命を余儀なくされた大量のプロテスタント系チェコ人の代わりに外国人（主としてドイツ人）が大量に入り込み、チェコ国内の残ったカトリック系チェコ人もドイツ化していき、チェコ語とチェコ文化はさげすまれるようになって衰退していき、ドイツ語とドイツ文化が圧倒的に優勢になっていった。そのような状況の中で、18 世紀後半にチェコ語とチェコ文化を再生しようとしたチェコ民族再生運動が始まった時、半ばドイツ化していたチェコ人にとって、チェコ人とはどのような民族なのか、またチェコ人の祖国はどのような国なのか、よく見えなかった。

チェコ民族再生運動について興味深い研究を書いたマツラによれば、チェコ民族再生運動以降のチェコ人のアイデンティティに特徴的なのは、民族の存在への自明ならざる眼差し、自らのアイデンティティについての了解の問題性（疑わしさ）である。マツラによれば、「我々はイギリス人である、なぜならイギリス人だからだ」とか、「我々はフランス人である、なぜならフランス人だからだ」といった「自然な」了解の仕方とは異なり、チェコ人のアイデンティティには選択の意識が伴い、「我々はチェコ人である、なぜならそう決意したからだ」という了解の仕方をしている。これは覚醒しつつある小民族一般の意識の特徴というわけではなく、例えばスロヴァキア人はチェコ人よりももっと小さな民族であるにもかかわらず、やはり「我々はスロヴァキア人である、なぜならスロヴァキア人だからだ」という了解の仕方をしている。このようなチェコ人のアイデンティティ意識の特徴は、19 世紀初頭にはまだ存在の見通しがつかなかったチェコ民族が、当時の必要性和可能性をも超えるほどの要求を掲げたことと関係があり、そこではアイデンティティとその属性（祖国・民族・言語）は単に受容されるものというよりも創造されるものであったという²¹。

マツラが指摘しているようなチェコ人のアイデンティティの非自明性・問題性の意識は、ユングマンやパラツキーなど、チェコ語を母語としながらドイツ語の中で教養と文化を身につけたが、それにもかかわらずドイツ世界に完全に同化せずにチェコ世界（言語・文化・民族・祖国）を（再）創造しようとした、主として市民階級出身の「覚醒者」（＝チェコ民族再生運動の推進者）たちに典型的なアイデンティティ意識と言えよう。というのも、ドイツ化していたチェコ貴族はエスニックなアイデンティティにほとんど無関心で

²¹ Vladimír Macura, *Masarykovy boty a jiné semi(o)fejetony* (Praha: Pražská imaginace, 1993), s. 11.

I 論文

あったし、またチェコ語話者であった農民や下層市民の大部分も、民族的に覚醒し始める前は、自分が何人であるかということに悩まされずに、問題性以前の世界に暮らしていたからである。

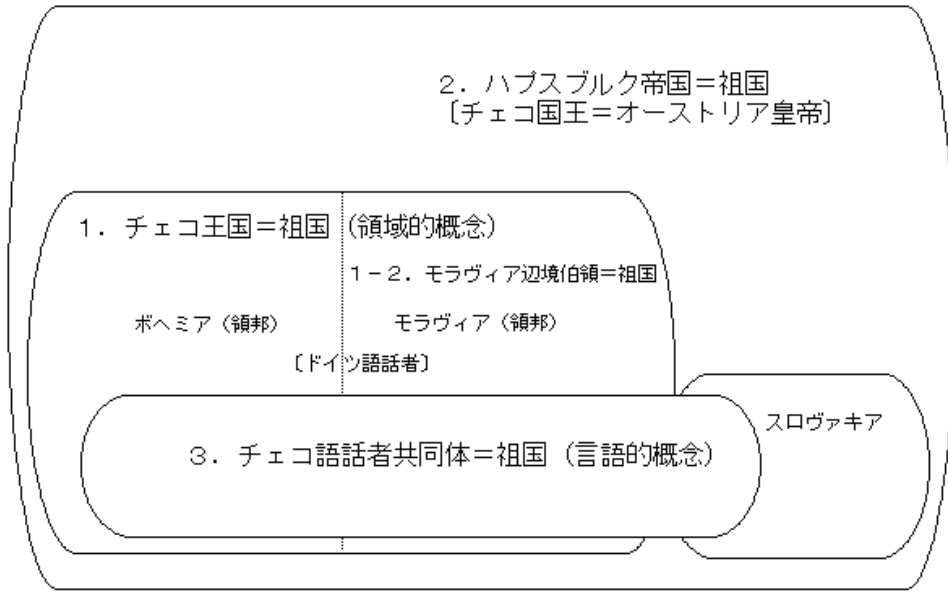
このような事情に加えて、またそれと関係して、チェコ民族再生運動初期以来チェコの歴史の見直しがなされつつあったこともあり、彼らにとってチェコの民族と祖国は自明なものではなく、(再)創造されるべきものであった。つまり、「覚醒者」たちにとってはチェコの民族と祖国がどういう姿をしているのか、あるいはしているべきなのかがはっきりとは見えず、それゆえに民族の自画像と祖国の風景画を描くように試み、よく見えない民族と祖国の姿を探し求め創り出さねばならなかったのである。

チェコ民族再生運動期には、パラツキーの『チェコ民族史』を始めとして盛んにチェコの歴史が書かれたが、それらはまさに、このような民族の自画像と祖国の風景画の試みだったと言える。また、フォークロア——民謡、民話、ことわざ、習俗など——の収集が盛んに行われたが、それらもそうだったと言える。エルベンは「チェコ民族の体系的な絵」を描くことを自らの課題とし、収集したフォークロアの素材から最終的には『チェコ民族の習俗』という統合的な著作を完成させようと意図していた——それは実現しなかった——が、これは歴史の分野におけるパラツキーの『チェコ民族史』に相当する、フォークロアの分野におけるチェコ民族の自画像の試みだったと言えよう。そして、このことはもちろん、歴史書やフォークロア的著作だけに当てはまることなく、(それらに続いた)芸術作品にも当てはまる。

この点で典型的なのが、まさにティルの「わが故郷はいずこ？」という詩なのである。つまり、この詩の第一連はまさに祖国の(あるべき)風景画であり、第二連はまさに民族の(あるべき)自画像であると言えよう。

ところが、ここで問題なのは、チェコ民族再生運動期に重要な役割を果たした「*vlást* ヴラスト(祖国ないし故郷)」概念は当時、曖昧で重層的なものだったということである。

「*vlást* ヴラスト(祖国ないし故郷)」は、第一に主として領域的な概念として用いられ、チェコ人もドイツ人も区別されずにその住民であるチェコ王国を指した。当時チェコ王国は形式的にはまだ存在していたが、実質的にはほとんどハプスブルク家の属領と化しており、啓蒙専制君主の中央集権主義によってその傾向はさらに強められた。そのような中でハプスブルク帝国皇帝の中央集権主義に対抗するために、「祖国」としてのチェコ王国がクローズアップされてきたのである。さらに、封建的諸制度が解体し、領主の領土に縛り付けられていた農奴が解放され、住民が移動するようになるにつれて、複雑な歴史を持つ巨大な多民族国家に住む人々の所属する場所としての「祖国」の概念が問題になってきたと考えられる。この「祖国」の領域的概念においては、モラヴィア辺境伯領を「祖国」ないし「故郷」と見なす意識も一部には存在した。



vlast (祖国) 概念の重層性

第二に、「祖国」の概念は、チェコ国王が同時にハプスブルク帝国皇帝であるという人格的同一性に基づいて、ハプスブルク帝国を「祖国」と見なす概念へと拡張された（特にナポレオン戦争の際に）。ただし、この「祖国」概念はチェコ人の中にはそれほど広まらなかった。

第三に、「祖国」の概念は逆に、（ドイツ語話者と区別される）チェコ語話者の共同体という言語的概念へと限定・縮小された（ただし、この概念においては、初めのうちスロヴァキア語をチェコ語の方言と見なす言語観にしたがって、「祖国」がスロヴァキア人にも広げられた）。この場合、「祖国」は地理的に規定されるものというよりも、言語・文化的に規定されるものと言える²²。そのような「祖国」の言語・文化的な概念は、すでに1806年にヤン・ネイエドリーが「祖国愛について」において次のようにはっきりと打ち出している。

祖国は、自分の子供たちを分け隔てなく等しなみに愛する、普遍的な母である。[…]
 …] 祖国は、子供たちが自分の母に対してそうするように、すべての住民が滅びさせまいと努める国である。[……]

自らの祖国、すなわち自らの母語と自民族の慣習を心から熱く愛することが [各人の義務である]。

²²Cf. Felix Vodička et al., *Dějiny české literatury II: Literatura národního obrození* (Praha: Akademie, 1960), II, s. 126.

I 論文

我々チェコ人は、かつては多くの民族にとって芸術と学問の教師であったのに、今やこれほど深く落ち込んで、自らの自然な言葉をなおざりにし、遠くや近くの民族、異民族や言葉では親類の民族に対して、永遠の恥辱になるのであろうか？²³（傍点引用者）

ここで祖国はチェコ語話者の目に見えない「想像の共同体」であり、その祖国は住民を貧富や身分の差にかかわらず、「母」のように（チェコ語を話す）同じ子供として等しなみに抱擁するのである。そして、もしもチェコ語が消滅すれば——国土が存続していようとも——チェコ人の祖国も消滅してしまうのである。逆に言うと、国土を奪われても、チェコ語話者の共同体が残っていれば祖国も存続している、ということになる。

この第三の「祖国」の概念は「言語民族主義」の伸張と共に広まることになるが、この概念においては、一つには、チェコ語よりもドイツ語の方がよくできるような「チェコ人」をどのように捉えるべきか、つまり（ドイツ人とは異なる）チェコ人の「チェコ性」とは一体何なのかという問題が生じた。またもう一つには、チェコ語話者の「想像の共同体」としての「祖国」は具体的な場所としては一体どこなのかという問題が生じた（ティルの「わが故郷はいずこ？」の中の言葉「チェコ人の間に——わが故郷あり！」を参照）。

ティルの「わが故郷はいずこ？」は、チェコ人に自分たちの民族と祖国について、先に例示した「わが故郷はいずこ？」の改作に見られるような否定的な表象ではなく、肯定的な表象を与えた。それは、チェコ民族再生運動初期にさげすまれていたチェコ語の格上げと同じく、チェコ人としての自己蔑視の克服と自尊心の回復に役立ったと考えられる。そして実は、このことこそ——それがいかなる手段によって為されるのかということとは別として——さげすまれた小言語と小文化が内に崩潰せずに持ちこたえるために、おそらくは最も肝心なことなのである。なぜなら、言うまでもないことだが、言語はそれ自体が生きているわけではなく、それを用いる人々がいて初めて生き続けられるからである。人々が母語をさげすみ放棄するようになれば、その言葉は生命力を失っていき、やがては死に至るのである。チェコ民族再生運動が生み出した、民族と祖国とその起源などについての表象は——その虚構性や非現実性は別として——そのような自己蔑視の克服と自尊心の回復という機能を果たし、小言語と小文化が——外圧のみならず内圧にもさらされて——崩潰することを防ぐのに役立ったのだと言えよう。

しかしながら、『フィドロヴァチカ』に描かれたような、クレオール的とも言える現実の言語的混沌と雑然さの方が、実は自然であり、世の常態であり、望ましいときえ言えるかもしれない——小言語がさげすまれて衰滅することさえないならば……。『フィドロヴァチカ、あるいは怒りもなく争いもなく』という題名の後半の「あるいは怒りもなく争いもなく」という部分はふつう注目されず、この題名を挙げる時には省略されてさえしまうのだが、実はこの後半部分は、そのような混沌として雑然とした世界の中での方が人々

²³Jan Nejedlý, „O lásce k vlasti,“ in Jaromír Plich, *Antologie z české literatury národního obrození* (Praha: SPN, 1978), s. 90-91.

は「怒りもなく争いもなく」暮らしていけることを示唆していると解釈できるかもしれないのである²⁴。そして逆に、現実を見ることのできない盲目の老人が純粋なチェコ語で「わが故郷はいずこ？」と歌って幻視する、純粋なチェコの「失樂園」と「理想郷」の表象は——未来において、もしも本当に「失樂園」が回復され「理想郷」が実現された暁には——その純粋主義が異質なものの排除の論理を発動させる危険を胚胎しているとさえ言えるのである——「言語民族主義」という純粋主義が……。なぜなら、「チェコ人（＝チェコ語話者）の間に——わが故郷（＝祖国）あり！」というのは、裏を返せば、「わが故郷（＝祖国）の中に——ドイツ人（＝非チェコ語話者）なし！」ということを意味するからである。

3

チェコ民族再生運動は、強大なドイツ語・ドイツ文化に圧迫された弱小のチェコ語・チェコ文化を「再生」ないし再創造してそれを消滅から守ったという、言語・文化の擁護の興味深い事例を提供していると同時に、その運動から一種の自衛として発展したナショナリズムが、自足的、自己閉鎖的、さらには排他的な傾向さえ示し、それがいかなる弱点になりうるかというアポリアをも提示している。そして、まさにチェコの場合のように「言語民族主義」に基づいて樹立された国家の原理的弱点を典型的かつ象徴的に示しているのが、ティルの「わが故郷はいずこ？」という、チェコスロヴァキア独立後に国歌とされた歌なのだと思うのである。

考えてみれば、ティルの「わが故郷はいずこ？」の第一連（「チェコの国——わが故郷！」）は、先の図で示した *vlast*（祖国）概念のうち 1 の領域的概念——すなわち現実的な国土——に対応し、第二連（「チェコ人の間に——わが故郷あり！」）は 3 の言語的概念——すなわち目に見えない「想像の共同体」——に対応している。別言すれば、第一連は「領邦の愛郷主義」²⁵の表象化であり、第二連は「言語民族主義」の表象化と考えられる

²⁴ ちなみに作家のネルダは、東ボヘミアの町ヘジュマヌーフ・ムニェステツを訪れたときに、れっきとしたチェコ語を話しながらも自分はチェコ人でもドイツ人でもなく「中立人 (*neutrál*)」だと言う宿屋のお上のことを書いている。Cf. Macura, *op. cit.*, s. 54-55. 民族的宣伝によって民族意識をかきたてられていない人々の中には、このような「中立」的なアイデンティティ意識を持っている者たちがいたのである。また、民族意識は地域的にも差があり、強力な民族運動が展開されていたボヘミア地方では住民の民族意識が強かったが、モラヴィア地方とシレジア地方では 20 世紀初頭まで、民族・政治的な意識に先行する領域的な意識が広がっていたという。例えばチェシーン（ポーランド語名チェシン）地方では、1921 年の調査でも、ポーランド人とチェコ人とドイツ人の民族性の間の過渡的なエスニック集団という意味での「シレジア人」と自らを見なした者が 47,314 人もいたという。Cf. Jirí Kořalka, *Češi v habsburské říši a v Evropě 1815-1914: Sociálněhistorické souvislosti vytvoření novodobého národa a národnostní otázky v českých zemích* (Praha: Argo 1996), s. 139.

²⁵ バロック時代以降強まった、民族に関係なく自分たちの領邦（チェコ王国とモラヴィア辺境伯領）を愛し重んじるイデオロギー。

I 論文

のである。つまり、第一連と第二連は異なるイデオロギーと祖国概念を表象化していて、そこにはズレがあり、この歌は矛盾を孕んでいると言えるのである²⁶。

しかし、その矛盾は、「わが故郷はいずこ？」を純粋なチェコ語で歌った盲目の老人には気づかれなかった。なぜなら、第一に、当時においてチェコの祖国と民族の概念には非自明性が濃厚につきまとっていて、第一連と第二連との間のズレは明確に意識されなかったからである。第二に、盲目の老人は、チェコ人のみならずドイツ人（さらにはその他の民族）も住んでいる領域的な *vlast*（祖国）は国境によって画されていることが見えなかった——あるいは見なくてすんだ——し、そもそもチェコスロヴァキア独立以前はこの地の住民にとって国境というものがそれほど大きな意味を持っていなかったからである。第三に、当時はチェコ人が独立国家を樹立するなどということは想定外だったからである。

しかしながら、1918年にチェコスロヴァキアという独立国家が樹立されることになると、チェコ語話者の言語的・文化的・精神的共同体としての目に見えない故郷＝祖国が、国境によって画された目に見える国土と重ね合わされるならば、そこから「チェコスロヴァキアの中にドイツ人なし」という排除の論理が発動しうるようになった。「チェコ人の間に——わが故郷あり！」というように表象化された祖国には、ドイツ人の居場所はなく、スロヴァキアに住んでいたハンガリー人の居場所もなく、スロヴァキア文語を確立してチェコ人とは異なるアイデンティティ意識を持つようになっていたスロヴァキア人の居場所さえない。

このため、「チェコ人の間に——わが故郷あり！」と歌う第二連を除いて、第一連だけを国歌として歌い、さらにスロヴァキア人のために「タトラ山の上に稲光が走り」という

²⁶ ティルの友人の作家カレル・ボレスラフ・シュトルフ（1812～68）は、『フィドロヴァチカ』が発表されたのと同じ1834年に「*vlast* 祖国」と「*domov* 故郷」とを区別して、「*vlast* 祖国」を「*národ* 民族」と同一視し、「*domov* 故郷」を「*země* 土地」と同一視して、次のように述べたが、ティルはこの見解に賛意を表した。「一つの民族の、一つの高い目的に向けた、共同的な援助、相互的な愛——それに基づくのが祖国（*vlast*）であり、それが祖国の本質である。[……] それは我々の祖国（*vlast*）であるが、我々が住んでいる土地（*země*）ではない。なぜなら、悪しき敵は我々を土地から追い出すことができるが、追い出された民族が過酷な運命の荒野を長年さ迷ったとしても、自らの祖国を失うことはなく、多分もっと美しい祖国に到達するだろうからである」。Cf. Ferdinand Strojšek, „Jazykové zvláštnosti naší hymny,“ *Naše řeč*, 8, ročník 18, 1934.

このシュトルフの見解においては「*vlast* 祖国」と「*domov* 故郷」とが区別されているので、ティルの詩の第二連の「*mezi Čechy – domov můj!*（チェコ人の間に——わが故郷あり!）」の意味については解釈が分かれうるかもしれないが、国を失ったユダヤ人やポーランド人を想起させるようなシュトルフの「*vlast* 祖国」＝「*národ* 民族」観からすれば、やはりティルもチェコ人と祖国とを同一視していると解釈できるであろう。少なくとも、作者ティルの意図とは関係なく、この詩はそのように解釈されるようになったと考えてよいであろう。

別の民族賛歌²⁷を、「わが故郷はいずこ？」の直後に続けて——もちろんスロヴァキア語で——歌うこととし、この二つの歌をセットにして「チェコスロヴァキア国歌」とした（1993年のチェコスロヴァキア分裂後は、それぞれの歌がチェコとスロヴァキアそれぞれの国歌になった）。また、チェコスロヴァキア国内のマイノリティとなったドイツ人とハンガリー人のために、「わが故郷はいずこ？」の第一連の歌詞のドイツ語版²⁸とハンガリー語版を作って、彼らにも歌えるようにした（民族と国家との相違を明確に意識していたマサリクは、非チェコ系住民への配慮からこの「チェコスロヴァキア国歌」に反対し、新しい国歌を作ることを提案したが、マサリク大統領の絶大な権威をもってしてもそれを変えることはできなかった²⁹）。

しかしながら、このような措置にもかかわらず、ティルの「わが故郷はいずこ？」の第一連と第二連との間にあったズレと矛盾は、潜在的に残存したと思われる（つまり、第二連に表象化されたイデオロギーと祖国概念は、消え去ったわけではなかった）。そして、直接にはナチス・ドイツがチェコスロヴァキアの国境を外側から押し潰そうとしたことへの反動として、第二次大戦後、今度はチェコ人が内側から、チェコ語話者の「想像の共同体」としての目に見えない故郷＝祖国を押し広げて、国境によって画された目に見える国土と一致させ、このズレと矛盾を解消しようとする力が噴出したのであろう。その力が、（ナ

²⁷ 歌詞は次の通り。

Nad Tatrou sa blýska,	タトラ山の上に稲光が走り、
hromy divo bijú.	雷鳴が激しく轟く。
Zastavme ich bratia,	<small>はらから</small> 同胞よ、それをとどめよう、
veď sa ony stratia,	何となれば、それは消え失せて、
Slováci ožijú.	スロヴァキア人は生き返るだろう。

²⁸ ドイツ語版は、以下の通り。

Wo ist mein Heim?
 Mein Vaterland?
 Wo durch Wiesen Bäche brausen,
 Wo auf Felsen Wälder sausen,
 Wo ein Eden uns entzückt,
 Wenn der Lenz die Fluren schmückt:
 Dieses Land, so schön vor allen,
 Böhmen ist mein Heimatland.
 Böhmen ist mein Heimatland.

²⁹ マサリクは 1919 年に次のように述べている。「我々はドイツ人に、スロヴァキア人の国歌に感激するように要求することはできない。我々の『わが故郷はいずこ？』は、しかるべき修正を施せばドイツ人も歌うかもしれないが。我々には、国家に所属するすべての者にふさわしいような、新しい人民の国歌が必要である」。Cf. Sak, *op. cit.*, s. 40-41. またマサリクは、政府がチェコ人とスロヴァキア人はもちろんのこと、ドイツ人とハンガリー人とルテニア人（ルシーン人、カルパティア・ウクライナ人）も参加できる国歌のコンクールを催す必要があり、そして国歌の歌詞は国家の一体性と、共和国と民主主義への愛について語るようなものであるべきだと考えていた。Cf. Eva Broklová, „Charakter německé politické kultury v Masarykově pojetí,“ in Marie L. Neudorflová, ed., *Češi a Němci v pojetí a politice T. G. Masaryka* (Praha: Masarykův ústav AV ČR, 2004), s. 109.

チス協力者としての) ドイツ系住民の「odsun移動」、すなわち国外への強制移住の際に働いたのだと思われる。大戦直後の全般的混乱の中で、多くのドイツ人が「移動」の際に劣悪な環境に置かれ、赤痢などの伝染病によって——場合によってはチェコ人からのリンチを受けて——死亡し、しかも「移動」させられたのは——全般的な混乱の中でナチス非協力者だったことを証明するのは困難であったこともあり——必ずしも国家反逆罪を問われるべき明確なナチス協力者だけとは限らなかった。そうだとすれば、この時、かつて盲目の老人が幻視した理想の楽園は現実の地獄へと化したと言えるのではなかろうか？ そしてその原因は、目に見えない「創造の共同体」を目に見える国土と同一視する発想そのものに潜んでいたと言えるであろう。さらに言えば、これは決してチェコだけの特殊性ではない。スミスが『ネイションとエスニシティ』において示したように、「すべてのネイションは、領域的原則とエスニックな原則³⁰ [……] の双方の刻印を帯び」、この二元性を持つネイション概念そのものに、「固有の不安定さがつきまとっている」³¹ (傍点引用者) ののである。

先にも指摘したように、両大戦間の多民族国家チェコスロヴァキア第一次共和国は、寛容なマイノリティ保護法や外国人亡命者の手厚い保護や高度な民主主義で知られる。1918年の独立当初この共和国に非協力的で敵対的さえあったドイツ人も、マサリク大統領の働きかけのもとで1926年には入閣して、チェコ人・ドイツ人・スロヴァキア人が共同で政府を形成するようにさえた。そして、特にナチズムが台頭してくるとプラハではチェコ人とドイツ人が一致協力してナチズムに対抗しようとする気運が高まった。これについては、カフカの親友であったユダヤ系ドイツ語作家マックス・ブロートが、次のように証言している。

プラハにおける社交生活と芸術生活には当時、特徴的なところがあった。すなわち、チェコ人のサークルとドイツ人のサークルは、確かに大部分、それぞれの民族だけで閉鎖的に社交を行っていたのである。だが、多くの例外もあった。第一次共和国[一九一八—三八年]の最後の頃に関係は改善し、万里の長城は打ち抜かれた。接点はたくさんあった。ナ・プシーコピエ通りの一つの宮殿の中に、両方の言語に開かれていて、政府によって援助されていた「社交クラブ」があった。さらに、ドイツ人はチェコ人の劇場やコンサートに通い、チェコ人もその逆をしていた。チェコ人の生活におけるあらゆる文化的出来事(劇場・音楽・美術・文学)については、もちろん幾つかの(全部のではないが)ドイツ語新聞・雑誌に常に詳しく報告されていた。そして、その逆もまた行われていた。「俳優クラブ」は、演劇の上演を企画するに当たって、近代初期のチェコ文

³⁰ 「エスニックな原則」とは、この時代のチェコの場合、言語共同体を「民族」と見なす「言語民族主義」の原則になる。

³¹ アントニー・D・スミス『ネイションとエスニシティ——歴史社会学的考察』巢山靖司他訳(名古屋大学出版会、1999年)、176-177頁。

学から古い喜劇『チェコ人とドイツ人』を選んだ。この戯曲は、一つか二つの役が […] ドイツ語で書かれ、その他の役がチェコ語で書かれている、という点で面白かった。両民族の間の誤解を無邪気なやり方で示すのだが、その誤解はしかし最後には、少なくとも身近な仲間内では、友愛の牧歌によって克服されるのだった。ナチスの侵略前夜の、共和国のすでに危機的な数ヶ月、ミュンヘンの屈服 [1938 年の「ミュンヘン協定」] の数ヶ月前に行われた上演は、プラハにセンセーションを巻き起こした。[……] 劇場の切符は売り切れで、上演が繰り返された。[……] 注目すべきは、見事なドイツ語を話す、チェコ語劇場の卓越した俳優ヴィドラ氏が、この戯曲におけるドイツ人の役を演じ、他方、ドイツ語劇場の俳優・演出家タウプ氏が、舞台上で美しいチェコ語を話したことだった。古い無邪気な笑劇を政治問題とし、双方の側で多くの善意が示されたのである。

32

1939 年のナチスによるチェコスロヴァキア侵略に際して、ナチスに賛同しないドイツ人や外国人の多くは国外に脱出したが、国内にとどまったドイツ人の中にはナチスに抵抗した者も決して少なくなかった（彼らの多くは処刑されたり、強制収容所に送られたり、結局国を去ることを強いられたりした）。このようにチェコスロヴァキア国民が団結してナチスの侵略に敢然と立ち向かう可能性がなかったわけではないにもかかわらず、現実にはチェコスロヴァキアはナチスに完全に解体されることになってしまったのである。

1918 年の独立から僅か約 20 年でナチスの侵略を受けるという悲運に見舞われ、国内における諸民族の友好・協力関係が十分に発展する時間がなかったことは間違いないが、それにもかかわらず、やはりナチスの影響下で諸民族が分裂していき、最終的には多民族国家が解体した大きな原因の一つとして、「わが故郷はいずこ？」という詩に表象化された祖国概念の矛盾があったと考えられるのである。

おわりに

ナショナリズムは自らの言語や民族という偶然性だけに自足しようとする傾向を半ば必然的に持つ。しかしながら、そのように自足する限り、自民族の範囲を越える民族間関係・国際関係において生じる破局的危機を克服することはできない。

直接にナチスによる惨劇を経験し、その後のチェコの長い悲劇の歴史を体験したチェコの哲学者ヤン・パトチカ（1907～77）は、『チェコ人とは何か？』（1973 年頃）において、チェコ・ナショナリズムについて次のように述べている。

³² Max Brod, *Der Prager Kreis* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1979), S. 177.

I 論文

近代ナショナリズムは、私には概して何やら過去の残り滓で遺物のように思える。中世の普遍性たるキリスト教は、あらゆる言語的・文化的・地域的個別主義の上に、それらにアーチをかけて結びつける、より高いものとして打ち立てられていたのだが、それがなくなった後に残ったのは、アーチを架けられていたところのものであった。それはすなわち、特殊性、民族性、個々バラバラな言語と文化である。そして人々は、それより高いものを知らなかったので、自分たちがその中で生きること慣れていたところのものを、人間性の具体的な器官、さらには直接に源泉とした。確かに、我々の故郷は事実上の偶然性の中にあり、偶然性なしに生きることはいかなるわけにもいかない。しかしそれでは、個別的で偶然的なものしか存在しないのなら、あるいはそれだけが我々みなに共通のものであるのなら、我々はいかにして他者と出会うことができるであろうか？ [……] ハプスブルク帝国の中に、このようなヨーロッパの「遺物」が集中していたのである。³³ (傍点引用者)

そして、第一次大戦におけるオーストリア＝ハンガリーの敗戦と共にハプスブルク帝国から独立したチェコスロヴァキア共和国の成立をチェコ系住民の多くが「自らの民族的願望の実現」と捉えたことが、この国家にとって致命的なものとなった、とパトチカは断じた³⁴。

このパトチカの引用に繋げて言うならば、宗教的な面で諸民族を繋げていたキリスト教会を代表するローマ教皇に、世俗的な面に対応するのがハプスブルク帝国の皇帝であったと言えよう。つまり、ハプスブルク帝国においては皇帝が一種の「メタ人格」となって、諸国家の（国王に代表される）諸人格を（まがりなりにも）統合していたと考えられるのである。そして、キリスト教が力を失い、ハプスブルク帝国が崩壊し、諸人格を統合する「メタ人格」としてのローマ教皇が後退し、ハプスブルク皇帝が消え去ったとき、人々は諸人格を統合する「メタ人格」を見だしあぐね、諸民族を団結させ、諸人格を統合することがきわめて難しくなったのだと言えよう。

ただし、チェコスロヴァキア第一次共和国の場合は、チェコ人を母、スロヴァキア人を父とし、ドイツ語で教育を受けてドイツ文化に深く親しみ、反ユダヤ主義との闘いによってユダヤ人たちの共感も得ていたマサリクが、この「メタ人格」にかなり近い役割を果たしていたと言える。

ここで言う「メタ人格」とは、「メタ視点」と言い換えてもよい。つまり、共存する複数の諸民族集団それぞれの視点・立場・主張を——どれか一つに自己同一化することを極力避けつつ——まず「多視点的」に理解するように努め、その上でそれらの視点・立場・主張を鳥瞰し、それらを噛み合わせ、折り合わせ、対話させうるような「視点」の謂いである。両大戦間のチェコスロヴァキア第一次共和国は、今日、多文化主義国家において諸

³³ Jan Patočka, „Co jsou Češi,“ in *Sebrané spisy*, sv. 13 (Praha: Oikoymenth, 2006), s. 303.

³⁴ Patočka, „Co jsou Češi,“ s. 320-321.

民族集団が互いに干渉し合わない「自由」の中で相互理解を欠いたまま孤立的に自分たちの社会を築いてしまう「柱状化」と言われる状態に近かったと考えられる。しかしながら、先のブロートの証言にも示されているように、「柱状化」を克服しようとする試みもある程度成功した。また、チェコスロヴァキア建国当初から「わが故郷はいつこ？」をチェコ国歌とすることに反対して、「国家に所属するすべての者にふさわしいような、新しい人民の国歌が必要だ」と主張していたマサリク大統領は、今にして思えば、当時としては例外的で先駆的に、かなりの程度にこのような「メタ視点」＝「メタ人格」の持ち主であったと言えよう。

ジョージ・バーナード・ショーは、もしもヨーロッパ連邦を造るとしたら、その大統領たるべき人はマサリクだと主張したが³⁵、それはヨーロッパ連邦にはまさに、ヨーロッパの多様な諸民族の主張・立場・視点を鳥瞰し、それらを噛み合わせ、折り合わせ、対話させうるような「メタ視点」＝「メタ人格」の持ち主が必要だと考えたからではなかろうか？

両大戦間チェコスロヴァキアの経験は、今日の欧州連合を考える上でも、さらに一般に多民族共存の問題を考える上でも参考になると思われる。

汎ヨーロッパ主義を唱えて「EUの父」とも呼ばれるリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー（1894～1972）がチェコに領地を持っていたドイツ系貴族であり、マサリクと同じくコスモポリタンのウィーン大学で哲学を学んだことは、恐らく偶然ではない。ヨーロッパを代表する多民族国家ハプスブルク帝国の伝統から出てきた人物と言えよう。

³⁵ Cf. Otakar Odložilík, "Masaryk's Idea of Democracy," *The University of Toronto Quarterly*, Vol. XXI, no. 1(Oct., 1951), 1.



「わが故郷はいずこ？」の図像（2点とも1940年代初頭）

出典：Státní hymna České republiky v proměnách doby (Praha: Úřad vlády České republiky: Národní muzeu : Národní divadlo: Český rozhlas, 2008).